

文学 〈二〉

文学史 〜石川啄木〜

今回の学習のポイント

「石川啄木」について知ろう！

国語監修・執筆

古宮才由里

石川啄木（いしかわ・たくぼく）明治十九年（一八八六）〜明治四十五年（一九一）

岩手出身。本名、一。歌人、詩人。明星派の詩人から出発して、貧困と病苦の生活感情を平明に表現し、実生活に根ざす短歌を詠んだ。三行書きという新しい表現形式に特色がある。

ペンネーム「啄木」啄木はキツツキのこと。中学以来のペンネーム白蘋（はくひん）改名。「啄木」に病気でやせ衰えた自身の姿を重ねたとも。詩「啄木鳥」に才能を認めた与謝野鉄幹の勧めによるものとも言われている。

代表作 『一握の砂』 『悲しき玩具』 など

短歌

不來方のお城の草に寝ころびて

空に吸われし

十五の心

『一握の砂』所収、明治四十三年

「不來方のお城」は「盛岡城」とも呼ばれています。啄木が通った盛岡中学校の近くにこのお城がありました。寝転んでみると、広々としてどこまでも続く青い空、ぽっかり浮かぶ白雲。そんな空を見ながら、いつの間にか無心になっていく青年時代の記憶がよみがえってくるような作品です。

啄木は中学時代、教室を抜け出しては、ここで草の上に寝転び、禁じられていた文学書を読みふけたと言われています。

金田一京助とのかかわり

この番組の講師・金田一秀穂先生の祖父・金田一京助はユーカラ（アイヌの叙事詩）の研究や言語学者として著名な人物です。啄木と同じ岩手県出身で、四歳年上の先輩でした。啄木は軍人を志していましたが、金田一に影響されて文学の道に引き込まれ、その才能を発揮するようになりました。中学時代、金田一家を訪ねては文学書を借りて読みふけたとも言われています。啄木は後に「明星」の代表的な詩人になりますが、そのきっかけもまた彼の勧めによるものでした。

金田一は、弟のように啄木の世話をしました。東京では病弱な啄木を自分の家に下宿させたり、生活費や医療費を工面したりしています。人間関係のトラブルを収めることもありました。啄木が二十六歳という若さで亡くなった折もその火葬に立ち会いました。啄木の文学と生涯を支えた重要な人物です。

旧渋民尋常小学校代用教員時代（明治三十九年）

啄木は、結婚後故郷渋民村で代用教員として働いて生活費を得ようとしていました。渋民尋常小学校は校長を含めて四人の職場でしたが、啄木は教育の仕事に熱心に取り組み、自分自身を日本一の代用教員であると自負していたと言われています。啄木にとっては、経済的な苦しみや不快感から解放された幸福な時期でした。

短歌

はたらけど
はたらけど
はたらけど猶わが生活楽にならざり
ぢつと手を見る

『二握の砂』所収、明治四十三年

どんなに働いても生活が楽にならない貧しい労働者の現実。社会の不条理を無視して、不甲斐ない自分のせいだと深く内省しているような作品です。作中では、「手」が労働のシンボルです。

この作品を発表したころ、啄木は東京朝日新聞社の校正係として働いていました。借金が大きく膨らみ、当時の金額で一、三七二円ほどあったと言われています。啄木の当時の月給は二五円ほどでした。

短歌

友がみなわれよりえらく見ゆる日よ
花を買ひ来て
妻としたしむ

『二握の砂』所収、明治四十三年

啄木が東京朝日新聞社の校正係として働いていたころ、盛岡中学時代に親しんだ友人たちの出世話を耳にするようになりました。啄木は文学の道半ば。やるせなさや情けなさを、痛切に感じたのにちがひありません。そのようなとき、好きな花や妻のことに心を向け直して心静かに生きようとする啄木の心情が歌われています。苦労や悲運を共にする妻への労いも感じられる一首です。「花」は、啄木が幼いころから故郷で親しみ、心慰められるものでした。

啄木の短歌、生活実感を詠む

啄木の短歌は、日常における喜怒哀楽を実感に基づいて表現されているのが特徴です。しかし、「嬉しい」、「悲しい」など感情を直接表す言葉は使われていません。実際に見たものや体験をそのまま平明に歌って、その時々的心情を表現しています。三行の分かち書き、口ずさめるリズムのよさ、これも魅力の一つです。

まとめ

啄木は、自己の状況や社会のありさまと向き合って真剣に生き、その時、その時に得た素直な実感を率直に表現した歌人です。一人の人間の弱さや苦悩、また理想やあこがれを歌い続けました。才能にも恵まれた啄木は、多くの人に支えられ、生涯文学に挑み続けた人でもありました。その短歌には時代を超えたりアリアーティーがあり、今も多くの人を魅了しています。